
おっさんが逝くIS物語

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おっさんが逝くIS物語

【Nコード】

N3816X

【作者名】

不知火仁

【あらすじ】

大神蜜。ニートで駄目人間で童貞である。そんな彼は、ある日ナンプパされたビッチを殴ったはいいがその彼氏である御曹司イケメンによって殺されてしまった。そんな彼を転生させるといった神が現れた。そして、転生先は・・・インフィニット・ストラトスだった。

※タイトル受けがちよつと危ないと思ったので変更しました。

プロローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う（前書き）

知っている方はどうも。初めての方はこんにちわ。

思うがままに書いた。後悔はしていない。

プロローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う

はて？ここはどこだろうか・・・。

ふと俺は思った。

こういう時は慌てず、落ち着いて行動するものだ。俺ってカッコイイ！！

さて、確かに昨日唯に“無・理・や・り”街に連れて行かれたんだ。あ、唯って俺の幼馴染。まあ、美少女の足元に及ばない女だな。話を戻す。一人で歩いてたら迷子になり、いきなり変な女にナンパされた。

「俺は童貞だ。テメエみたいなビッチに俺の純血は渡さねえ」

って言ったら切れて、ウザいから殴った。

そしたら、次のビッチの男が来てなんか話して帰らせたら次の日・・・

・

「あ、俺殺されたんだ」

俺は答えに辿りついてしまったようだ。
って！！

「チクシヨメー！！結局は金か？権力なのか？くたばれイ・ケ・メ・ン！！爆発しろー！！！」

「おい」

なんだか声がする。でも、男だから聞こえない振り。

「おい！！聞いているのか？」

「ワタシノミミ、美少女二しか反応シナイ」

「反応してるじゃろうが」

「粉バナナだ！！！」

「日本語おk？」

すると俺の目の前には・・・胸糞悪く、加齢臭のする爺がいた。

「誰が胸糞悪く、加齢臭のする爺だ！！」

「サイコパス？！」

「黙れ！」

「——（しゃ、喋れない）」

「当然。僕は神だから」

「髪？」

あ、喋れた。

「ゴッドじゃ」

「俺は幼女神しか信じない」

「まあいい。実はお前さん死んだから転生させることにしたんじゃ」

「却下だ。転生より蘇生させろ」

「却下☆」

「んだよ！！神なら蘇生ぐらいさせろよ！俺はまだ童貞卒業してねーんだよ！！女抱きてーんだよ！！俺の聖剣まだ未使用なんだよ！！」

「黙れ、童貞」

「童貞舐めんな！！」

くしばらくウザい言い争いがあるので綺麗な空を眺めてお待ちくださいー

「で、転生っていうけどなに？ テンプレ乙的な原作ブレイク的なアレですか？」

「そうじゃ」

「いやだ。天国逝きたい。天使とイチャイチャしたい。界王様から界王拳ならう」

「黙れ、邪気眼。ちなみにテメーにやる天使はいねえ」

「……くそ、死んでも童貞には居場所がないのかよ」

「だから、転生させてやると言っているだろうに」

「やだよ、めんどくさい。また人生一からやり直すのなんかダリイもん」

「わかった、わかった。だから、キンクリミたくしてやるから」

「それなら許可する」

「はー（メンドクサイ童貞じゃのう）」

神はあまりにもウザい童貞に会話すら苦痛に感じるようになった。

「転生場所？」

インフィニット・ストラトス
「IS」

「なにそれ？」

「んゝ、女が世界を支配してる？」

「ようわからん」

「まあ行けばわかる」

まあ、そっちのが面白いしのう。
ほっほっほ。

「というわけで転生するに当たって、お前さんに特典。まあ、願いをいくつか聞いてやろう」

「別にいらねえ」

「ひょ！なんで？！身体能力MAXとか俺TUEEEEとかしたくないのか？！」

「別にニートに能力はいらない。マウスをクリックできるだけの力

があればいい。それに俺童貞歴30歳だから魔法使えるし」

「……………」

ほ、本当じゃ。地味に魔力というかMPがある……。

「そ、それでも神としての立場が……」

「じゃあ、アレでいいや。人をくれ」

「人？」

「ああ、なんていうか技術的な人間が欲しいんだよ。そうだなー、デモンベインのウェストでいいや」

「（また、濃くて地味なキャラを選んだのう）わかった。それにしよう」

「あんがと」

「それとなにか願いが思いついたら念じればまたここに来るようにしておくからのう」

「誰が爺と会いたがる……かーーーーー!!!!!!」

するといきなり俺の足元に穴が開き、俺はそこに落ちた。そして、それは次第にしまつてまた白い空間に戻り、神はその場か

ら消えた。

後日

「はー、厄介な奴だったのう」

高級な椅子に座りこの間の童貞のことを思い出していた神。最近、部下からあの童貞についての資料ができたのでさっそくみてみた。

「・・・うそーん」

そこには確かにニートで駄目人間で童貞とあったが、幼馴染の超美少女から好意を寄せられているがまるっきし気付いていない最低の男。

「って、マジで美少女!!」

その子の写真をみてあら不思議。まるで女神のような女性だった。しかも、あの童貞の同い年で未婚。しかも・・・だったとは。

「本当、蘇生してやればよかったかのう・・・」

これでは、彼女がかわいそうじゃ。うん、彼女が。

それから、目で順に追っていた。するとあるものが目に付いた。

そこには・・・

あの【大神一郎】の末裔である。と書かれていた。

つまり・・・・・・・・

【大神壱】は、実はモテる（特殊なイベントをクリアしたのみ）

「本当、駄目人間じゃなければいい人生を送れたものを・・・」

そう思った儂は彼の“頼み”にちよつとだけサービスすることにしたのだった。

プロローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う（後書き）

というわけで、始めてしまったよ。

しかし、こんな作品でも読んで感想くれたらうれしい。
実際はもう一つの方の息抜きでやっているんだが・・・。

さて、あと一話と設定を出すのでよろしく

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思った（前書き）

きつとこれから迷言の嵐を連発してくれるはず。

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思った

おっす、オラ大神蛮！30歳で魔法使いの童貞だ。見知らぬ世界に来て、オラなんだかワクワクして――。

「こねえよ、馬鹿」

改めて、大神蛮だ。さて、転生したのでちょっと現状報告だ。気付いたらいつもの俺だった。よくわからんが、一応俺は別の人生を過ごしていたらしい。でも、記憶をみる限りでは死ぬ前と全然変わってなかったぜ！

ただ、幼馴染の【葛城唯】だけはいなかった。べ、別に寂しかったわけじゃないからな！あいつがいなくて清々してるところだ！

ここで、俺の頼んだことを教えよう。ドクターウエストみたいな技術屋がほしいという頼みだ。なんで、これにしたかというところ。そういうやつがいればギャグ補正でなんでも造ってくれる気がするからだ。

しかし、ところどころいい。

ここで、どんな間違い起きたかは知らんが……ウエストだけじゃなくて覇道財閥まであった。

……デモベフラグ？ロリ本は何処かな？

おっほん！

で、関係はというと。霸道構造が大神家と仲良かったⅡ俺も顔見知りⅡ瑠璃から兄的な存在へ。みたいな感じだ。

ちなみにウエストにもあったよ。やっぱり、あいつは俺が認める漢だけはあったぜ。

で、この世界。ISだっけ？

記憶で知ったが・・・女が使ったって宝の持ち腐れだぜ！男が使ってこそその浪漫があると俺は思うね。

そして、現在はどうと・・・。

「蚤、起きなさい！もう、お昼なんですよ！」

霸道財閥の総帥に起こされていた。

「んだよ、瑠璃。まだ、お昼だろ？いい子は寝る時間だ」

「いい子は起きている時間です！」

「30の俺にいい子なんて言われてもな〜」

「もう、しりません！」

―ボタン！

扉を閉めて出て行った。

あんなこと言っただって、また明日起こしに来てくるんだ。可愛い奴め。

あ？お前、紳士だらだって？

ばーろ。アレは妹的な存在だからいいんだよ。

にしても、お兄様と呼んでいたあの時代が懐かしい。

俺、育て方間違ったかな？

まあいいか。さて、寝よ。

《 瑠璃side 》

覇道瑠璃。世界にその名を轟かせる覇道財閥の総帥である。

そんな彼女、瑠璃は彼を起こしたあと自分のオフィスで溜息をついていた。

「はあ。まったく、蛭には困ったものです」

いつも、いつもああ言っただけ言う人間。ニートで駄目人間で童・

・こほん。なんですから。
いつも、心配している私の身にもなってほしいです。それに・・・
異性しても見てほしいのに・・・。

「お嬢様、また蛭様は駄々をこねているのですか？」

執事のウィンフィールドは紅茶を入れながら私に聞いてきました。

「駄々と言うよりは・・・子供です。はあ、昔はあんなにカッコイイ・・・くなかったですわね」

「ふ、そうですね。しかし、あれでも蛭様は大旦那様からは『あいつはやればできる子だ』といつも仰ってましたからね」

「お爺様の言葉を疑うわけではありませんが、やる時期が一年に一回あればいい方なんですから」

「それでも、蛭様のことは誇りに思っているんでしょう？」

「当然です。私の、自慢のお兄様ですから」

そう、お兄様は私の、世界で最高のお兄様なんですから。

《 End 》

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思った（後書き）

実は書いてて楽しい

主人公設定

主人公 大神 蛭

モデル ガンソードのヴァンをちよつとイケメンにした感じ？

容姿 ブサイクではなく、喋らなければそれなりの顔だったりする。
本人はブサイクだと思っている。

服装 普段着は何故かタキシードに似た物を着用し不思議な帽子をかぶっている（ガンソードのヴァンのアレ）

年齢 30歳 転生後18歳です☆（嘘）

能力 スカウター 邪気眼

大好きな者 美少女（蛭から見ても） 小さい子（紳士だから見守るだけ）

嫌いな者 イケメン（一夏も含まれる） あとウザい女

職業 ニート 自宅警備員 邪気眼使い 魔法使い見習い

友人関係 転生前 唯（幼馴染）
ソウルブラザーズ 魂友 転生後 ドクターウエスト

ト エルザ 霸道瑠璃 ウインフィールド その他財閥の人

二つ名 死ぬ前までは『無職な男 蛭』転生後『高校生な蛭』らしい
蛭から一言『俺は女だって殴れる』

唯依から一言『蛭はやればできる子』

備考

どこにでもいる普通のニートで駄目人間で童貞だった。ある日、変な女（蛭曰くビッチ）に『童貞きもーい』と言われカッとなって顔をぶん殴った。したら、そのビッチがどっかの御曹司の男の女で殺され、会いたくもない糞爺に転生させられた。

生前は上記のように童貞で駄目人間。彼女いない歴年齢であり、イ

ケメンが大嫌い。

しかし、そんな彼にも幼馴染の唯依という子がおり。（ちなみに彼女はエリートコースまっしぐら）。鬱陶しく思っていた（唯依に対してはツンデレ）。

また、30歳になったことで魔法が使える（ほんの些細な魔法）。他にも邪気眼で漫画を読めばある程度使えるというある意味でチート身体能力。

実はある血筋の人間で、たまに身体勝手に動くらしい？

作者曰く 『現実的な転生者を求めたらこんな感じかなと思った』
あと、つよきすのフカヒレが一番近い感じかもしれない。

幼馴染 葛城 唯依

まさに美少女と言わべき存在であるが蛭にとっては美少女の足元に及ばないらしい。

小さい頃から蛭と一緒に、ニートになった彼を今でも気かけ外に出そうとしている。

ぶっちゃけ蛭のことが好きだがまったく相手にされていないが彼女から見れば照れ隠しらしい。ちなみに※※である。

第二話 え、社会復帰しろ？俺もういい歳なんだけど（前書き）

不定期といいながら投稿する俺

第二話 え、社会復帰しろ？俺もういい歳なんだけど

すべてはこの一言から始まった。

「というわけで、蛭。あなたにはIS学園に行ってもらいます」

「なにがというわけで俺はあんなところにいかなくてはならないのか？」

ちなみに俺はISが使えるらしい。

回想。財閥の工場にいった〓ISがあった〓あーこれがISなのかぼちっと〓ん？なんか装着できたぞ。
てな感じ。

「それは、蛭。あなたを更正させるためです。このままではあなたは一生私が面倒をみなければいけません」

それはそれでいいのですが……。そ、それではお兄様のためになりませんかからね！

「えーヤダよお。瑠璃、俺を一生養ってくれるって言ったたろう？」

「じゃあ、結婚しましょう」

「妹で」

・・・ッ！お兄様はどうでもいい所で反応がいいんですから。

「それになあ、俺は30だぞ？高校生って柄じゃねえ」

「大丈夫ですよ、蛭様。ちょっと背が高くて、ちょっと老け顔な高校生で通りますから」

「さりげなくフォローすんな、ウインフィールド」

しかし、彼の言う通り蛭は背が高く老け顔なのでそれなりにみえなくはなかったりする。

「それに、蛭様」

「なんだ」

「もう先方と手続きを交してしまいましたので」

「・・・なにそれ。酷い。だから、権力って嫌い」

「それに、蛭以外の男性でISが使える人が発見されたいです」

から時期的には丁度いいんです」

「誰それ？」

「この方です」

ウィンフィールドがリストを見せてくれた。そこには……イケメンらしき顔をした餓鬼がいた。

「俺の嫌いなタイプ」

イケメンは死ねばいいと思う。

「でしょうね」

「それに、IS学園は女性だけです。蛮様の好きな美少女がみつかるかもしれませんよ？」

「む」

それを聞いて私はちょっと嫉妬してしまいました。彼はお兄様を行かせようとそう言っているのですが……やっぱりむかつきますわ。

「いるわけない。それに、餓鬼には興味ない」

「まあ、当然ですわよね」

「しかし、もう話は済ませてしまっていますし」

「俺はいないっいたらいいかない！」

まるで、おもちゃコーナーでおもちゃをねだるような子供だった。
それを見て瑠璃は溜息をつき、最終手段に出た。

「では、蛮。こうしましょう。もし、あなたがIS学園に三年在学
しちゃんと卒業できたら」

「できたら？」

「一生養ってあげます」

「マジ？」

「真剣まじです」

「「「・・・・・・」」」

「ヤッフーーーーー！！！！これで、俺も天の道みたいにロイヤ
ルニートだぜ！！！！」

配管工ジャンプをしながら叫びまくるおっさん。
やはり、自分の年齢などを自覚していないらしい。
だが、彼は肝心なことに気付いていなかった。

「（ふふ。これで、三年たてばお兄様は私のモ・ノ♪）」

瑠璃は策士だった。
対してウインフィールドは。

「（これで覇道財閥も安泰です）」

同じだった。

「イエーイ、空中一回転!!」

なぜか、跳んで一回くると回って見せた。ニートの癖にハイスペ
ツクである。

こうして、蜚のIS学園行きが決まったのである。
果たして、彼に一体どんな運命が待っているのか?!

次回まで、ご期待ください

「関係ないけど、フォーゼの名前の意味は40周年＝4（ふぉー）、0（ぜろ）でフォーゼなんだぜ？これで、友達に自慢しよう！」

「誰に言っているのですか、あなたは」

第二話 え、社会復帰しろ？俺もういい歳なんだけど（後書き）

さて、次回からIS学園に行くことになります。
しかし、おっさんが行くのって無理あるよねー

第三話　ほらみろ。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんは

なんていうかこれからいろいろと飛ばします。あと、主人公視点が多いと思われます。

それと、主人公はあるくクロスオーバー。いろんな人の名前やネタが出てきます。

第三話 ほらみる。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんは

《 童貞 side 》

拝啓

天国にいるお父様、お母様。あなた達のいい意味で期待を裏切った息子は今15年ぶりの高校生活を迎えようとしています。

まあ、これでも幼馴染の唯に無理やり同じ大学。確か・・・MIT（マサチューセツさんとか大学）にも言ったような気がします。そこで、天才ちびっこ先生にも会いました。ベッキー、元気かな・・・。

それは、さておき。私は今IS学園、自分の教室である1-Aにいます。席は窓側の一番後ろ。まさに、絶好の場所。幼女神は常に俺と共にあるらしいです。

やはり、周りは女ばかり。しかし、美少女は居ません。

あ、でも副担任の真耶ちゃんは別ですよ？眼鏡っ子で可愛い。そして、けしからんお胸をお持ちです。

で、ただいま自己紹介を行っております。男は俺以外にむかつくイケメンしかいません。

イケメンが自己紹介をしているのですが。

「織斑一夏です……。よろしく、お願いします……。以上で

す！」

はい、君。企業の面接は絶対に受からないね。間違いなく。
で、周りの女子も期待していたらしくかなり落ち込んでいる。テン
ション的に。

「まとも、自己紹介もできんのか貴様は」

現れたのはアレだ。確か・・・ブリーナク？だっけ。なんか有名な人。

俺は知らん。

というか、アレだね。ギャルゲーの気が強い委員長とか、お嬢様、
お姫様系の生徒会長とかなタイプだろう。

けど、中身を崩せば落ちるぜ・・・へっへ・・・。ま、落とさんが。

「改めて、初めまして諸君。私がこのクラスの担任の織斑千冬姉だ。
諸君を一年で使い物になる操縦者にするのが私の仕事だ。出来ない
ものには出来るまで指導をしてやる。逆らってもいいが私のいう事
を聞け、いいな」

じゃあ、授業受けたくないでござる。

『きゃあああああああ！！』

『本物よーーーーー!!!!』

うるさい。周りの女子がうるさい。
で、色々あって・・・。

「次、大神。さっさと自己紹介しろ」

かちーん。おじさん、怒っちゃったよ？
年上に対する礼儀がなってないんじゃないかな？調子に乗るなよ、
アバズレ。

「・・・大神蛮・・・d、です。こんななりですが自分はちょっと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です・・・。あ、間違えた」

『ズコーーーー』

なんか、大半が机に埋もれていた。ま、いっか。ばれたって俺に損得ないし。

「で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ねばいいと思う」

最初が肝心ってよく言うけど、ここで群れをつくる気はない。ていうか、美少女がいない時点でもう帰りたい。

あ、真耶ちゃんは違うからね。

《 End 》

《 織斑一夏side 》

俺の名は織斑一夏。偶然、ISが使える男になった男だ。

本当、なんで動かせちまったんだ……。周りは女子だけだし、俺以外にも男がいるけどなんか……。おっさんがいる。

で、自己紹介しただけで千冬姉にはぶたれるしろくなことがない。そして、あのおっさんの番。

「……。大神蛮……。d、です。こんななりですが自分はちよつと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です……。あ、間違えた」

って！やっぱり、おっさんなのか？もう、そういう年なのか？！

「で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ね

「ばいと思う」

は・・・？今、なんて言った？

と、とにかく。男同士、仲良くしたい。休憩時間に話しかけてみよう。俺は思った。

だが、まさかあんなことになるとはこの時俺は思っていなかった。

《 End 》

全員の自己紹介が終わり、休憩時間となった。

蛭は机に伏せ寝ていた。そんな彼に同じ男である一夏が話をしようと近づいた。男二人が一緒になっているその光景をクラス中の女子が見ていた。

「あの・・・大神さん？」

一夏はおそらく年上だと思ったので一応敬語で尋ねた。

「・・・ああん？」

「いや、同じ男同士だから・・・話をしたいなあと・・・」

気付けばイケメンが俺の前に立っていた。そして、俺はある事をしだした。

「（スカウターON!!）」

説明しよう。スカウターとはイケメンの数値を測るものである。基準を0とし、上からいくとイケメンであり、マイナスになるブサイクという数値が現れる。そして、一夏は・・・。

「（5、10・・・25。ここら辺は普通だな）」

ちなみに、本当のイケメンは測らずとも見ただけで殺意が湧くらしい。

「（30・・・40なに？まだ上がるだど・・・ふむ、55。ち、イケメンめ・・・こ、これは?!）」

すると驚きのデータが検出された。

「（は、ハーレムの可能性あり・・・だど？つまり、フラグ建築士というわけか。決まったな）」

そう、すでにこの瞬間から互いの関係は決まってしまったのだ。ていうか、関わること自体がありえないのだろう。

「失せろ、イケメン。俺はお前が嫌いだ。だから、二度と俺に話しかけるな」

「は？・・・いや、な、なんで!？」

「その口を接着剤で止められて欲しくないならとっと失せろ」

そう言いつつも俺は席を立ちがあり教室を出た。
ふ、全国のブサイクが見たら俺を賞賛するだろう。よくやったと。

こうして、俺の学園生活が幕を開けたのであった。

第三話 ほらみろ。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんは

次回の予定ではデモンベインが出てきそうです。

イケメンなんてふるぼっこ

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ（前書き）

同じところをまた書くのが面倒なのでかなり略しています。

正直、誰かの視点をするのが大変なんだよね。

まあ、とにかくデモンベインがでるよ！！

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ

唐突だが俺は馬鹿な餓鬼どもの喧嘩に巻き込まれた。

あの大佐殿に似たような声を持つお嬢様馬鹿があのにケメンに何か見下したようなことを言ったら馬鹿が食いついて・・・。

で一週間後に試合をすることになって、ついでだから俺もやれと命令してきやがった。

俺を巻き込むな！！

そして、一週間などあつという間に流れ。現在、俺はアリーナでの戦闘を見ている。

イケメンVS大佐殿もどき。

イケメンのISは白式と言うらしく、なんか見てる限り刀しかない。浪漫あるなあと思っていたが相手のISがブルー・ティアーズとかいう遠距離のISでどうみても振りだった。

なんか、ファンネルが飛んでるけど俺が想像していたファンネルと全然違う。

アレだよね、こう・・・ぴゅん、ぴゅん！ぴゅんって飛んでないんだ

よね！

メンドクサイのでその後の展開。

堕ちなさい！　||うわぁ！ドーン・・・||やりましたわ！||やってない

みたいな感じ。なんか、イケメンの機体が変わったけどそんなに変わってなくてね？

もし、これがデジモンだったらあの曲が流れるからめっちゃテンションがあがるんだけどな・・・。

まあ、感じ的に処刑BGMが流れないところをみると負けるな。イケメンは。ざまwwww。

そして、案の定イケメンは負けた。けっけ。

で、俺の番な訳だが。

「よし、大神。さっさとピットから出ろ」

「・・・へいへい」

「返事は、はいだ」

「ほーい」

「(ギロ！)」

へへーんだ。睨んでも怖くねえよ。

まあ、ここはちょっと挑発でもしておくか。

「たく、年上に対する態度がなってないんじゃないか？」

「そうだとっても、貴様私の“生徒”だ」

「ふん。俺が認めている教師は金八先生か尾木ママと地獄先生ぐらいだ」

「……」

「ふ、知らんか。教師の癖に、あの偉大な先生たちを」

まあ、両者ともこの世界にはいないとは思うが。

「あまり調子に乗るなよ？・・・童貞が」

言ったな。お前は言うてはならんことを言った。

確かに俺は童貞だ。認めている。俺は童貞だと。それを男に言われたってなんとも思わない。イケメンは除く。だが、女に言われるのだけは許してはならない。赦してはならない。

「この処女が・・・魔法使い舐めんなよ？」

―パチン!

俺は指を鳴らした。

しかし、周りに変化はない。

「ふん、一体何を……………」

「どうしたんですかあ? (2828)」

だが、すぐに効果は表れていた。それは、千冬自身だ。そう、魔法は彼女自身に起きていたのだ。

説明しよう。大神蛭はMPを消費することで本当にどうでもいい魔法が使えるのだ!

ちなみに、MPは30。まあ、年齢。意外と使ったら回復するのだが、回復の方法がこれまた意外でそういう系のモノをみれば回復する。感覚でわかるらしい。

「貴様……………」

ちなみに、蛭がかけた魔法は……………ホックを外す魔法であった。

「さ〜て、逝ってくるかな……………」

そして、俺は冷静に保っている女を置き去りにピットに向かった。

「じゃあ、いくかな……。アル」

『うむ、やっと出番か』

俺は腰のホルスターから本を取り出した。これが、俺の機体の待機形態である。しかも、なぜかAIつきで、そのAIがアル・アジフ。別に俺、そこまで願っていないんだけどな……。

『ほれ、さっさと起動キーを言わんか』

「なあ、本当にいなきやいけないのか？」

『何を言っている？お主だって、最初はノリノリでやっておったではないか』

「いや、アレは感動と言うか若気の至りというか……。若くないけど」

『とにかく言わんと起動しないからな』

「ケチ。……はあ、わかった。だから、合わせろ」

『うぬ。それでいいのだ』

そして、俺は気を取りなして。

「憎悪の空より来りて」

『正しき怒りを胸に』

「我らは魔を断つ剣をとる」

《 汝、無垢なる刃 デモンベイン！！ 》

纏うは鋼。だが、ただの鋼ではない。ヒビロカネと呼ばれる特殊合金、それは鉛の弾丸ではビクともしない強固な鋼。

それを全身に纏い、その姿は鋼鉄の戦士。

だが、それはISと呼ぶには相応しくない。そう、これはISではない。機体を動かすのは『銀鍵守護神機関』『獅子の心臓（コル・レニオス）』と呼ばれるISのコアとは別のモノ。そして、何よりこの機体を動かすのに必要な気合と勇気と根性である。

ちなみに、蛭にはどれも当てはまらないものだ。

だが、蛭が普通のISを動かしたのは確かである。

このデモンベインは覇道鋼造が立案し長年かけ、何故かうエストとかによって完成した。

とにかく、なんかスゲー機体なのだ！！

「さあて、いこうか」

『応!』

アリーナに出るとそこには俺を見下している大佐殿もどきが。

「あら、来ましたの? おじさまにおキツイでしょうから手加減でも差し上げましょうか?」

「・・・だってよ」

『ふん。青臭い餓鬼が。身の程知らずとはこのことよ』

まあ、確かにそうだ。デモンベインにはリミッターが何重にもかけてある。

ある一定までのエネルギーを設定し、それが終わったら負けという感じなのだ。

「それより、一つ聞きたいことがあるんだがいいか?」

「いいですわよ」

「お前貴族なんだってな」

「ええ、あなたみたいな庶民とは違いますわ」

「ふーん。まあ、こんなのが貴族とか笑わせるな」

「なんですって・・・」

蜜の言葉にセシリアは反応した。彼女は女尊男卑の影響が大きく、大きな態度をとっていたのだ。だから、彼の言葉にカチーンときたのだ。

「俺が知っている貴族は誇り高く、何より人を差別などしない」

そうあの誇り高き海賊の末裔？ 誇り高く、そして美しかったあの人。そう、昔は綺麗だった。けど、そんなことを言ったら俺は殺される。

「ふ、ふん。そんなの信用できませんわ」

「餓鬼にはわからんよ」

「なら、その誇り高い貴族を紹介してくださらない？」

「俺に勝ったら教えてやるよ」

「調子に乗って・・・いいですわ。手加減などしてあげません。徹底的に叩きのめして差し上げますわ」

「まったく、大佐殿もどきがなにを」

『両者位置について』

アナウンサーが入り両者位置につく。ちになみに、デモンベインは飛べないので地上にいる。

『試合開始』

「さあ、落ちなさい！」

「俺はもう地上にいるけどな」

ブルー・ティアーズが装備しているスターライトを避ける。それから、軽々とステップを踏みながら敵の攻撃を避ける。

「ッ、ちょこまかと」

「あー、だりい」

セシリアは必死に狙ってはいるが蜜はそれを避ける。しかも、飽きてきていた。

『こら、真面目にやらんか！』

「だってよ、避けてるだけじゃつまらないんだもん」

『仕掛ければいいだろが』

「んゝめんどくさいと言うか」

『まあ、お主が相手をするには弱いのは確かだな。うむ』

「餓鬼相手に向きになるのもなあ」

「何を一人でブツブツと！」

ちなみに、アルとの会話は蛭にしかできない。周りからは独り言を言っているようにしか見えない。

「それに・・・」

蛭はあることを思い出していた。

それは、このデモンベインは言わばゲームの最初と同じ状態なのだ。いや、第一章と言うべきか。武装はバルカンとアトランティス・ストライク、そしてレムリアインパクト。

特にレムリアインパクトは威力が高すぎるので使用が禁止。リミッター無でやるとIS諸共パイロットが昇華されちまうのさ！！だから、ニトクリスの鏡とかアトラック・ナチャもない。

「さらに言えば飛べないもんな」

『仕方あるまい。まだ、我とこやつは完全ではない』

そう飛べないのだ。跳べるが飛べない。なんていう矛盾。
まあ、原作でも後半しか飛んでないしな・・・。

『ん？なにやら向かってきたぞ？』

目をやるとそこにビットが来た。

俺思っただけどビットとかファンネルって言う人は年代が上で、ドラグーンと言う子はアレだと思っただよね。

「さあ、私のブルー・ティアーズで踊りなさい」

「悪いな。ダンスは美少女と踊るって決めてるんでな」

「私がそうでないと言いたいのかしら!？」

「青臭い餓鬼なんか興味ねえ」

「ッ！落ちなさい!!」

ブルー・ティアーズがデモンベインを狙う。
しかし、またもや簡単に避けられる。

「仕方ない、仕掛けるか」

『おお、お主が自分から動くとは』

アルは蛭が自分から動くことに驚いていた。まあ、動いたら負けと言っている男だから仕方がない。

「だって、終わらないんだもん」

『まあ、そうだな』

そして、遂に蛭が動く。
しかし、敵は空の上。蛭は意外な行動に移る。

「秘儀ビット跳び！」

すると彼はビットを踏み台にして彼女に近づいた。

「な！！」

流石の彼女も驚いていた。
そしてーーーー

「アル！」

『断鎖術式壱号ティマイオス、貳号クリティアス起動！』

デモンベインの強大な脚部？から出ている突起が起動する。

「行くぜ！アトランティス・・・」

最後のビットを踏み台にして高く跳びながら一回転。

『『ストライクーーーーー！！！！』』

まるで、流星のように蹴りを突き出しながら落ちてくるデモンベイン。

セシリアは避けようとするが反応が遅ぎ、アトランティス・ストライクをもろに喰らい。

「ぎゃあああああああ！！！」

ドーン！！

アリーナの壁にめり込んで激突した。
一方蛮は。

「決まったな」

『まあ、まずまずと言ったところだな』

まったく気にしていなかった。

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ（後書き）

実は、この世界というわ生前でもそうなんですがある作品とクロスしているのです。

まあ、今はでないけど。

さて、次回は一夏戦なんですけど圧倒的に一夏が負ける展開しか思いつかない。

第五話 イケメンは消毒だぁ~~~~!! (前書き)

放っておいたら評価がかなりあがっていた・・・。

なぜだ？

いや、うれしいんですけどね？

第五話 イケメンは消毒だぁ~~~~!!

《 千冬side 》

大神蜜。世間では二人目のISの男性操縦者。これを聞いてまず思ったのが、驚きだった。一夏に対してはあの馬鹿が仕組んだことだが、そいつは純粋にISを起動したと言うことになる。そして、さらに驚いたのがその年齢だった。

30歳・・・。

そう、私よりも年上でおっさんである。

当人からしてみれば苦痛以外の何物でもないだろう。

そして、政府から送られてきた資料にはほとんど個人情報掲載されていなかった。出身地、学歴・・・。そのほとんどが黒く塗り潰されていた。あったのは名前と生年月日と好きな者と嫌いな者ぐらいだった。

その中身も目を疑うものだったが・・・。

しかし、私もそんなモノを認めるはずがなく政府に問い合わせして帰ってきた言葉が。

『霸道財閥が関わっている』

覇道財閥。世界の覇道と呼ばれ、そこら辺にあるものからないものまで生産している世界的企業である。

政治にも一枚絡んでおり覇道に逆らうこと自体愚かだと思い知らされる。

さらに言えばここIS学園の投資も行なっているらしく、IS学園側としては逆らえない。つまりアレであり、政府からも。

『粗相のない扱いをするように。さらに言えば織斑一夏より重要人物』

と返ってきた。

だから、私はそれなりの対応しようとしたのだが……。最初のあいさつで。

『……大神蛮・・d、です。こんななりですが自分はちよつと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です……。あ、間違えた』

本人は正体を隠そうとしていたらしいがそれも早速失敗していた。さらに……。

『で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ぬばいいと思う』

本当に書いてあったことを言うとは思わなかった。
そのあと、一夏が彼に話しかけたがなにやら上手くいかなかったと聞いた。

そして、あの馬鹿がイギリスの候補生と面倒を起こし模擬戦をすることになった。

そこで私はワザと彼を巻き込んだ。理由は、それほど政府が大事にする理由が知りたかったためと興味だ。

だが、彼は人としては最低の部類に入った。

確かに彼の方が年上だが彼は生徒だ。

彼は反抗し、言い合いになり私はつい童貞と言ってしまった。向こうも私を処女といい。ていうか、なんで私がしょ、処女だとわかったのだ!?

（彼のスキルです）

そして、彼は魔法使いとか言いだした途端私のブラのホックが外れた。私は冷静を保ったが彼にはお見通しだった。

これで、私は彼を人として最低の部類として見た。

だが、それは模擬戦で考えを改めて考えさせられた。

セシリア・オルコットはそれなりにはやる生徒だ。初心者相手にしてはだが。

だが、所詮その程度。

だから、一夏が勝てなくても仕方がない。アレは機体と本人が原因であるが。

そして、アリーナに現れた彼のＩＳは異形だった。全身装甲であり、まさに鋼鉄の塊だ。

試合が始まり、戦いは始まった。

セシリアは相変わらずの戦いだった。対して彼はそれをすべて避けていた。

ただ、避けているのではない。ある一定の範囲内のみで避けているのだ。

そして、無駄のない動き。まるで、洗礼されたかのような動きだ。

彼はただ避けているだけだったのがとうとう動いた。と思ったらセシリアのＩＳのビットを踏み台にして彼は蹴りを放った。

驚くはその威力だ。セシリアはそのままアリーナの壁に埋め込んでいた・・・。

「これが彼の實力・・・」

私は、とんでもない男を怒らせたのかもしれない。

《 End 》

試合終了後。

壁に埋め込んでいるセシリアは職員に回収された。そのまま第三試合が開始されるため蜚はそのままアリーナに残っていた。

そして、器用なことに腕部と頭部の装甲を解除し煙草を吸っていた。

「ふうー。最近タバコ税が上がりそうでロクに吸えやしない」

『何を言っておる。その金は全部あの小娘の財布から出ているくせに』

「ちなみに訂正で出ているじゃなくて俺が抜き取ってるの」

『駄目だ、こいつ。それより、我の前では吸うな。匂いがつくだろうが!』

「鉄に匂いなんかつくのかよ?」

まあ、匂いが付いたらリセッシュでもかけておいてやるよ。それか、車で使う洗剤で吹くというてやる。

『お主、今馬鹿なこと考えておらんか?』

「気のせいだ」

『ぬう。お、来たぞ』

すると、向こうのピットから白い機体がやってきた。

ち、イケメンめ。俺のイケメンレーダがビンビンしてるぜ。きっとあの大佐殿もどきとすでにフラグを立てやがったな。

「なあ、アル。火炎放射器ってないか？」

『お主の思考がわかってしまう我が怖い』

『両者位置についてください』

放送が入る。

デモンベインはやはり地上で位置についている。

「ふうー。携帯灰皿を持ち歩いている俺カッコよくね？」

「タバコを吸ってない未成年に問われても困る」

「誰もテメエに言ってねえよ」

そういうとどこかに灰皿をしまう蛸。ちなみに、今言ったのはアルに向かってだ。

アルとの会話は蛸のみだ。それか、アル自信が回線を開くしかない。

「ッ。あなたが俺の何を気に入らないかは知らないが真剣にやらしてもらおう」

「すべてだ、小僧。ちなみに、真剣なんて軽々使うな。これは、人生の先輩からの教えだ」

「・・・どうも」

『試合開始』

そして、試合が始まった。

「はっはっは。イケメンは消毒だぁ~~~~!!」

火炎放射器はなにがそう言わないといけない気がする。

「はぁぁぁぁ!!」

対して一夏は接近戦しかできないためデモンベインとの距離を詰める。

雪片は発動しているだけでエネルギーを消費する欠陥武器だ。現在は通常の状態に収まっている。

「遅いなぁ」

『あ、それ』

後ろに体を反り、そのまま回転しながら避ける。
それから、再びセシリアと同じように避けるだけの戦闘が続く。

「くっ、ちゃんと戦えよ！」

一夏はそれに痺れを切らした。

「しゃねえな。ほれ、バルカン」

デモンベインの頭部からバルカンが発射される。相手の機体のことを知らない一夏はこれがあるとは知らずもろに受ける。威力は低いが、零落白夜というエネルギー喰いがあるため効果は少なからずある。

「馬鹿にして!!」

「感情に流されるとは、未熟! (キリッ)」

『大人げない・・・』

大振りに雪片を振る一夏だが蛭はそれを簡単にも――。

「我流白刃取り！」

そのまま受け止めた。一夏はまさか受け止められるとは思ってもおらず一瞬の隙が生まれた。蛭はそれを見逃さず、彼の腹に蹴りを入れる。

「ぐはッ！」

勢いで雪片を手放し吹き飛ばす。

「う・・・は、しまった！」

「そういえば、ISの武器は許可を出さないと他人は使えないらしいな。けどな・・・！」

「！」

蛭は奪った雪片で一夏を斬りつけた。

「剣なんて振れば問題ねえの」

「ぐうう！！返せー！！！！！」

「そして、剣なんてな」

そう言って雪片を膝で折る。

「折っちまえばただの鉄屑だ」

「デメエええええ!!」

雪片はかつて千冬が使っていたモノだという意識が強い。それが折られ、彼の逆鱗にでも触れたのだろう。だが、蜜にとってはどうでもいいことだ。

「本当、弱いな」

『まったくだ。これでは、先ほどの小娘とのがまだ殺り甲斐があったぞ』

「これこれ、字が違いますぞ」

『対して変わらん』

確かにそうだ。

まあ、イケメンの顔も見たくないのでケリをつけますか。

「アル」

『了解』

向かってくる一夏に対して蛮も走る。
そして――！。

「とう！！」

「なに！？」

接触するギリギリの所で上空へ跳ぶデモンベイン。

「我流！ライダーキック！」

動きを止めた一夏はそのまま攻撃を喰らい続ける。シールドエネルギーがどんどん減っていく。

「ウェー――イ！！」

「ぐう！がは――！！！！」

シールドを突破し絶対防御が発動。
白式のエネルギーは0となった。

『勝者 大神蛮』

こうして、クラス代表決定戦は幕を閉じた。
大神蛮の全勝という形で。

「ちなみに、俺はライダーとしては剣が^{フレイド}一番好き」

『また関係ないことを』

第五話 イケメンは消毒だぁ~~~~!! (後書き)

実はこれって手抜きなんだぜ？

今後の展開として鈴がくるのですが彼は基本かわらないので一気にトーナメント戦に移る可能性が高いんですね。

いやだって、絡む要素がないんだもん。

絡むと言ったら原作三巻ぐらいか・・。

あ、ラウラは一夏のハーレムに入らないよ！
だって、俺ラウラが好きだもんね！

第六話 疲れた後の一杯は格別だね（前書き）

今回は短いです。それと、幼馴染の葛城唯依なのですが、依をつけるのを忘れていることに気づきさっき訂正しておきました。たぶん、あまり出していないのでどこか治っていないところがあると思いますがスルーしてね！

第六話 疲れた後の一杯は格別だね

模擬戦から数日後。クラス代表はあのイケメンに決定した。なぜかって？

それは俺が辞退したに決まっているじゃないか。

俺がそんなメンドクサイことをすると思うか？ 思わないだろう。

で、今日はなにやらその代表に決まったイケメンのパーティーをやっているらしいのだが俺は行っていない。

実は誘われなかった・・・。

なんてことはなく、誘われたが断った。だって、俺がイケメンを祝うか？ ありえない。

唯が美少女になるぐらいありえない。

それにしても、唯依の奴どうしているだろうか・・・。

俺が居なくなっただけで清々しているに違いないな。いい加減、男見つけろってんだ。

俺の世界は一夫多妻制だから問題ない（キリッ）。

って、なんで俺あいつの心配してんだよ。俺だってあいつと別れることができて清々してるんだつうの！

「はぁー・・・」

つい溜息を吐いてしまった。俺はテーブルの上に置いてある缶ビールに手を伸ばし飲んだ。

「ゴクゴク・・・ぷっはー！ー！！くくく」

『まったく、サラリーマンかお前は』

「うるせえな。いいだろうが」

『しょうもない』

図で例えると飲み過ぎている親父を止める妻といったところなのか？

「ところで、戦闘データの蓄積はどうだ？」

『十分、とは言えん。レベルが低すぎる』

「それと、お前が高性能過ぎるのもあるな」

『それもあるが、お主が強すぎると我は思うが？（2828）』

「俺はただの童貞だ」

アルは何やら確信めいたことが言うが蜜はそれを否定する。
大神蜜。彼は一体何者なのか……。

ーコンコン

「ん、誰だ？」

ドアノックは確かに自分の部屋だと言うことはわかる。しかし、俺の部屋に一体誰が来ると言うのか……。ちよつと考えてみる。

ぽんぽんぽん・・・ティン！

「いないな」

『いないのかい！』

アルが地味にツツコム。
ビールを片手に重い腰を上げ扉へ向かう。

ーコンコン

再びノックがされる。

「はいはい。今あけますよーっと・・・・・・・・」

蛭は硬直した。それは、まさか自分の部屋にこの女が訪ねてくるとは思っていなかったからだ。
その人物とは。

「その、こんばんは」

「こんばんは」

一応俺の担任である織斑千冬であった。
驚愕だった。何故？ Why？
一体全体どこにそんな要素が？

「で、一体何の用です？」

「いや、その・・・・謝罪をしようと思ひまして・・・」

思ひまして？ なんで敬語なんだ？ 俺いつ、フラグ立てた？ むしろ、
最悪だろう。あんなことまでしたんだし。

「その、私はあなたのことを最初は最低で人間として最悪で童貞野

郎と思っていた・・・ました」

「・・・・・・（＃）」

ねえ、俺怒っていいよね？

「しかし、先日の模擬戦であなたに対する見方が変わり」

「で？」

「だから、その・・・すみませんでした」

あの千冬が頭を下げた。

「・・・・・・」

ていうか、俺謝られても困るんだけど？
別に俺彼女のことなんてどうでもいいし。

「いや、まあ俺も大人気なかったというし。その、失礼なことを言
ったし」

これは、本心ではある。だって、こんなことを言われたら・・・・・・

・あ。

「その、お詫びとい訳ではないのですが晩御飯と一緒に……
っていないじゃないか」

なぜか、目の前に彼の姿はない。辺りを見回してみると。

「真耶ちゅわ~~~~ん」

「あ、大神さん」

ぴよんぴよんと跳ねながら廊下の向こうに何故かいた真耶に向かつていく彼の姿があった。

「これから、食事でもどうだい（キリッ）」

まるで、某シティーハンターみたいなノリだった。

「え、その……私なんかでよろしいのでしょうか？」

何故か顔を赤くする真耶。

「君だから、いいのさ（キラーン）」

「は、はい／＼」

そのまま蛭は真耶の肩に手を回し二人で食堂に向かった。それを、ただ傍観することしができなかった千冬はというと。

「……なんだ、この異常なまでに込み上げる殺意は」

その後、真耶は悪夢をみたことをここに記しておく。

第六話 疲れた後の一杯は格別だね（後書き）

これを読んで千冬のフラグ立ったと思ったやつ・

残念だったな！！

彼女はヒロインじゃないのだよ！！

まあ、今のところだけ。

原作キャラでヒロインを考えているのは・・・3, 4ぐらい？
全部俺の趣味だけだな！！

ただ、とあるキャラは蛭にとある台詞を言わせたいだけというのもあつたりなかったり。

第七話 大神先生の大人の恋愛講座

《 童貞side 》

クラス代表が決定してからの少しの時間が経った。アレから、イケメンは俺のことを遠からずと睨んでいるようだ。まあ、アレだね。俺が真面目に戦わず、それで負けたから悔しいんだろうね。若いね〜。

まあ、例え何度挑まれようと負ける気はしないね。何故かって？俺がイケメンによって倒されることはないからだ。そして、俺はすべてのブサイクと童貞の友であるところに言っておこう。

さて、今の時間はすでに朝を過ぎている。よって、普通なら授業を受けているんだろうが俺は早速一時間目からサボっている。

だって、つまらないんだもん。まあ、実技なら出てもいいかなあと思ったけど……

この間の専用機持ちによる実技

「よし、今回は急上昇と急降下の訓練をする」

と、あのブラコン教師が指示を出す。専用機持ちということになっているので当然俺もやるのだが・・・。

ブラコンの合図でイケメンと大佐殿もどきは飛び立った。あ、大佐殿もどきは結局何にも進展はないよ？だって、あのイケメンによって落されたんだもん（恋的な意味で）

「大神・・・殿。なぜ、飛ばないのですか？」

そして、何故か敬語。何があったし。

「ん？だって、俺飛ばないもん」

『跳べるがな』

間際らしいよね。

「は？」

「だから、飛ばないんだって」

「・・・わかりました」

俺がそういうと周りの小娘共がデモンベインのことを。

『欠陥品』『本当にIS?』『出来損ない』『おっさんにはきつ
よ』

とか言っているのだが。

『今欠陥品って言った小娘出てこんかい!!』

まあ。アルが反応しているのだが。しかし、俺は大人なのでスルー。
それに、あとで飛べるし。まだ。術式が完成してないってウエスト
が言ってた。

で、俺は待っている間暇なので、宙に浮かんで寝っころがっていた。

「飛べるだ・・・じゃないですか」

「これは、次元連結システムの応用だ」

「・・・」

「まあ、飛べないだけで跳べるだけだな」

「・・・」

わからないか。まあ、仕方がない。そして、上にいる二人が急降下

をする。大佐殿もどきは普通に降りたがイケメンはそのまま地上に激突。

「ざま
W
W
W
W
W
W
W
W
! ! ! ! !
」

俺は盛大に笑ってやった。痛い視線がいくつか向けられたが、次に行ったのが武器の展開。

しかし、ここでも俺は。

「武器？　んなもんねえ」

固定武装しかないためデモンベインは出すモノがない。
それを聞いて再び小娘共が陰口を言っていたのだが、まさかアルが切れて。

—ヒュン！
パスツ！

一人の小娘の足元にバルカンが一発放たれた。しかも、器用なことに発砲音を出さなかった。

「（お前流石にそれはやめろって。俺が被害受けたぞ！！）」

『知るか！我を侮辱した当然の報いなのだ！』

本当に餓鬼でした。

とまあ、こんな感じで授業なんて出れる訳もなく俺はこうしてサボっているわけなのだ。

「空が綺麗だ……」

『そうだなあ……』

大人が屋上のタンクの上で仰向けになり、その隣に本が置いて喋っているのだ。

『なあ、蜚』

「なんだよ、アル」

ふとアルが何かを言いだした。

『体が欲しいのう』

「……ウエストに相談だ」

『何その、牛乳に相談のCMみたいなノリは』

「だってなあ・・・ん？」

すると誰かが屋上にやってきた。

「アレは・・・ポニーテール」

ぶっちゃけ名前覚えていないんだな、これが。

《 End 》

《 ポニーテールside 》

今日、噂で隣のクラスの二組に転校生が来たらしい。別に、それは構わない。だが、その相手が問題だった。

一夏はそいつをセカンド幼馴染と言っていた。

そのあと色々あって、部屋を巡ったり、酢豚とか酢豚とか酢豚とか・・・。

変な約束までしおって！

まあ、アレはあいつに同情する。アレは完全に一夏が悪い。

「はぁ」

なんで、あいつはあんなにも鈍感なんだ。それでいて、無意識に女を落している。

・・・よく考えたら最低だ。

「あいつは、なんでああなんだ」

「ほー、何やら恋の悩みとみた」

「誰だ!」

いきなり声をかけられ? 私は咄嗟に当たりを見回した。

「ここだ、ここ」

声の方向に体を向けるとそこには・・・あのいけ好かない年増がいた。

《 End 》

「どうやら、恋で悩んでいるとみた」

「あなたには関係ない」

連れないね。

「まあ、相手はあの朴念仁じゃなあ」

「あなたに何がわかる?!」

「わかるよ。俺の恋愛アンテナがビンビン立ってる」

例えるなら妖怪アンテナ的なアレだ。

「とりあえず、あのイケメンと付き合いたいなら早くした方がいいぞ」

「それはどういうことだ？」

「お前もわかっていると思うが、あいつは無意識に女を落とす最低の男だ」

「それは、同意する」

うん。それは否定できないからな。

「男女共に鈍感はいけない。そうだな、自分を第三者としてあいつを見てみる。あいつは、どんどん無意識に女を落していく。どう思う？」

「それは・・・やっぱり最低だと思う」

「だろ？つまり、誰かが止めなければいけない。それが、お前だ」

私を指名してきた、

「わ、私?!」

「そうだ。とにかく誰かが止めなければならない」

「し、しかしどうしたら」

気付けば箒・ポニーは蜜の話術に乗せられていた。

「簡単だ。ふうー」

一度煙草を吸ってはいた。

「既成事実だ」

「き、既成事実?!」

「そうだ。あいゆうどうしようもない男は自覚させるか、世論を味方にすれば簡単に落ちる」

「し、しかしどうしたら・・・」

「簡単だ、寝ろ」

「ね、ねねね!!!!」

「これが一番効果的だ。寝るだけじゃだめだな。せめて裸になって寝てろ。そうすれば、既成事実のできあがりだ」

「な、なるほど」

「わかったらなら、早速実践しろ。早くしないと他の女に盗られるぞ」

「あ、ありがとうございます!」

そう言って、ポニーは去っていった。

「・・・・・・・・恋か。もう、そんなものどこかに捨てちまったぜ」

蛭は中二病発言をした。それもさりと。

『イタタタタ!!』

「燃やすぞ、テメエ!!」

アルを持ち上げ、そのままライターを寄せる。

『やめんか、この戯け!!』

「んだと?!」

『やるか?!』

人と本が喧嘩する奇妙な光景が繰り広げられていた。

「にしても、ポニーテールか……。絶滅危惧種だよな」

『お前は突然何を言いだす』

「そういえば、ポニーっていいよなって言ったら唯依の奴翌日ポニーにしたっけ。まあ、全然可愛くなかったが」

『唯依とは誰だ?』

「ポニー」

アルには相変わらずのスルーだった。ちなみに、唯依は美少女なのでポニーにしたら男性には大好評だったとか。一応、言っておくが、
蛭は唯依を美少女だとは認めていないので。ここ、テストに出るよ!

「ポニポニー・・・(きつと、夜な夜な馬のマスクをかぶったポニ男がブラシを持って高校生を無理やりポニーテールにする輩が現れるに違いない)」

『ポニー?』

「あ、後で瑠璃の髪型ポニーにしてみよう!」

『小娘も大変だな・・・』

こうして、蛭は再び授業をサボるのであった

「そういえば、なんかトーナメント戦ってのがあるらしいぞ」

『ま、我には関係ないがな』

「だよな〜〜（＾０＾）」

第七話 大神先生の大人の恋愛講座（後書き）

あの役を簪にしたのはただ単に適任だっただけなのだ。

別にこれでイケメンのルートが単一になったわけじゃないのだ！！

で、次回で一巻分が終わりという超ハイスピードさらに急展開。

君はついてこれることができるか………？

あと、原作ヒロイン。今のところ二人なんだけど、知りたい方挙手！

そして、次回はなんと蛭が……

第八話 今日の俺はちょっとだけ本気だぜ・・・一割くらいな（前書き）

更新が遅れて申し訳ない。文化祭などで忙しくてなかなかネットをする暇がなかったのだ。

ちょっとシリアス

そして、やっとあいつが登場・・・！？

第八話 今日の俺はちょっとだけ本気だぜ……一割くらいな

トーナメント翌日。

おや、気付いたらもうトーナメント始まっているではないか。これが、噂に聞くご都合主義というやつか。

「さて、あのイケメンを倒してくれる相手は誰かな……」

対戦表が表示されている掲示板をみるとそこには織斑一夏VS凰鈴音とあった。

鈴音？中国人か。チャイニーズ！

「ん!？」

しかし、なぜだ。俺の恋愛アンテナがビンビンと何かを感じている……。

は！もしか、またイケメンに……。け、これだからイケメンは嫌いなんだ。

『おい、蛭。あのイケメンの対戦相手のISなんて呼ぶと思う?』

「ん？えーと、こう・・・りゅうじゃないのか？」

『ふふーん。シェンロンって言うらしいぞ？』

「神龍？！ワロスｗｗｗｗ。願い事でも叶えてくれるってか（笑）」

まあ、その割にはあんま強そうに見えないな。
なにか、金色のオーラを纏って道着に亀ってあったら強そうにみえるけどな。界だと期間限定で強くなれるが。

『それでは、試合開始』

気付けばすでに試合が始まった。

俺は一応アリーナに赴いているが一人で出入口近くの壁におっかかりタバコを吸いながら試合を見ている。

「（ヒソヒソ・・・）」

しかし、相変わらず嫌われているねエ。ちらちらと俺の方を見ている。

餓鬼には興味ないからどうでもいいんだけどさ。

『にしても、お遊びだ。まだ、軍の合同演習のが楽しいぞ』

「軍かぁ……。懐かしいな」

『そういえば、お主は何かのテストパイロットをしていたと言っておったな？』

中二病ではなく、これはガチだったりする。

「昔の話だ、昔の」

まあ、この世界に来てからの俺の日常は30歳になってからのようなものだ。この場合転生ではなく、違う世界にいる自分に憑依したことになるのか？

まあ、俺の歩んでいた歴史はある程度同じだ。ただ、俺のいた世界に覇道財閥とISをぶちこんだ感じた。

『にしても、あのツインテールは動きがそれなりにできているな』

「イケメンは糞だけどだな。そもそも、武器が刀とかどうみても玄人専用だろうが。ていうか治ったんだ、アレ。結構本気で折ったりしたんだけどw」

『まあ、アレだな。主人公補正という奴だな』

「嫌だねー、そういうのは。で、ここからマジな話なんだけどさ」

『む、なんだ？』

「――そろそろ、武器欲しくない？」

『――それは、言えている』

いや、描写とか戦闘が格闘戦だけがつまらなくなっただけで訳じゃないんだよ？

『一応、私の術式の一部がすでに完成しつつあると言っておったからなあ奴は』

「ウェストか。たまに、あいつの破壊ロボに乗りてえんだよな」

え、ISサイズじゃないよ。実物だよ？あのドリルがいいんだよなあ。

『（あと、私のアレも頼んでおきましょう。うん、そうしよう）』

アルもアルで何か企んでいるようである。

「はあ、眠む……ん？なんだ、アレ」

欠伸をして上を見上げたら何か落ちてくるんだけど。

「まさか、俺の下に謎のロボットと美少女が遂に!!」

『この浮気者め!』

——ひゅ~~~~ドン————!!

それは、アリーナのシールドを通って乱入してきた。
砂埃が晴れるとそこにはISがいた。

「なんだ、ISか・・・」

『ただに残念なんだ、お前は?!』

「美少女・・・」

『我がいるだろう!』

「・・・・・・(じゅん)」

『う・・・・・・』

確かにアルは、人になれば確かに美少女？だろう。しかし、今は・・・本。本なのである。

『生徒の皆さんは至急避難してください！！繰り返します・・・』

『きゃあああああ』

「なんていう、お約束」

周りの女は逃げているが俺は逃げない。だって、逃げたら逆に危ないってフラグがあるだろう？

「さて、有能なアル君？あのISの解析はどうかね？」

『アレか？アレには生体反応がないぞ』

「無人兵器か」

しかし、無人機にしてはダサイよな。MDとかの格好いい。Wでふと思った。無人機はよくない。

「これでは、ゲームだ（キリッ）」

『・・・』

「エレガントではないな（キリッ）」

『お前には無理だ』

「そうか・・・」

閣下、やっぱりカッコイイよ。俺も閣下の下で働きたい。
警備員とか最適だね。自宅警備員とか。

『お、小娘共が動くぞ』

「・・・ドッカーン、ひゅーん、ズバーン!!」

『なぜに効果音?』

実際その通りに敵は倒れた。

『やったか?!』

イケメンが言っているがそれはやってない。

「もう、帰る・・・!!」

『蛭!』

「ああ・・・来る」

俺は再び空を見上げる。そして、また何かが落ちてくる。それは、ISではない。

それは、シールドを突き破りそのまま中破したISに“寄生”した。アレは・・・。

「降魔」

『まさか、本当に・・・』

「いくぞ、アル！」

『応! !』

蛭は鎧を纏い、跳んだ。敵を倒すべく。

《 イケメンside 》

最近ろくなことばかり起こる。セシリアに絡まれたり、おっさんに

は嫌われるし、鈴が来たらなんか喧嘩になる。
本当に最悪だ。

とにかく、トーナメント戦では鈴と仲直りしようと思ったら逆効果だった。

鈴は強かった。

俺も甘かったと思った。おっさんに負けてイライラしていたのは確かだ。けど、自惚れていたのかもしれない。

そんな時、いきなり変なISが乱入してきた。

あとで、俺達はそれが無人機だとわかり破壊しようとした。なんとか、機能を停止ができたと思ったら振ってきた何かと合体？した。

「なによ、アレ」

「気持ち悪いな」

そう、気持ち悪い。まるで、生物と機械が混ざったような・・・。

「キアアアアアアアア！！！」

そして、そいつは叫びだした。
同時に、上から声が響いた。

「アトランティス・ストライク!!」

シールドを突破し現れたのは……おっさんだった。

《 End 》

「大神蚕……推参」

「キアアアアア!!」

目の前にいるISはすでにISではない。失った右腕は奴の腕に。
所々あいつの肉体が飛び出ており、頭部は気持ち悪い顔をしている。

「寄生……。完全ではないな」

かつて、機械に降魔を動力源として動かしていたと聞いていたがこれはまた別の形だな。

「おっさん、なんで」

「・・・・・・・・」

「誰、こいつ？」

「おい、無視するーぐう!!」

一夏は突然彼に腹に蹴りをくらい気絶した。

「ちょ、あんた何してんのよ！」

「五月蠅い餓鬼を黙らしたただけだ。とつとと連れて逃げろ」

「は？なんで、逃げるのよ。また、あいつを」

「なら、その自信に溺れて死ね」

「なによ、あん・・・!？」

突如、降魔の右腕が彼に向かって伸びてきた。

それは、速く鈴に向かって伸びる。しかし、それは届くことがない。
デモンベインの手刀によって切断されたからだ。

「ち、血？」

「今日の俺はマジだぜ・・・一割だがな」

今の彼には甘さはない。それは、自らの使命を果たすためだ。

『どうする？すでに、映像は残っているぞ』

「解析されても困る」

『なら、やるのだな？』

「ああ。術式解凍！」

『応！ナアカルコード入力、術式解凍！』

蛮は右腕を翳す。同時に、背後に魔術術式が展開される。

「光差す世界に、汝ら暗黒住まう場所なし！乾かず餓えず無に還れ！」

デモンベインは突撃する。機体のあちこちから降魔の触手が迫る。デモンベインはそれを俊敏なフットワークで避け接近する。そして、互いの距離が零になり。その右掌を突き出す。

「レムリア・インパクトーーーーー！！！！」

刹那、降魔を巨大な光が包む。

『昇華！』

デモンベインはそのまま離脱。そして、光が収束し降魔ごと消滅。降魔がいた場所には小さなクレータしか残っていなかった。すべてを消滅させた。

デモンベインは、気付けば高い塔に立っていて腕を組んでいた。

「降魔、また世に現れる。か」

『どうする、止めるか？』

「まさか、自分の使命を果たさ。それに、俺達は魔を断つ剣。だろ？」

『ふ、その通りだな。我は、汝の剣であり盾。汝は我が護る』

「頼むぜ、相棒」

『ああ、マスター』

【大神】それは、かつて世界を影で救ってきた英雄の名。

【デモンベイン】それは、魔を断つ剣

【大神蚩】それは、英雄と破邪の血を受け継ぎ現代に存在する魔を断つ剣

大神蚩とアル・アジフがいる限り、この世に悪が栄えたためしはない。

「というわけで、今日から【魔を断つ蚩】と名乗るかな」

『じゃあ、その前は？』

「高校生な蚩だ」

『まんまじゃな』

——霸道邸

「はい、わかりましたわ。ええ、それではおやすみなさい。蛭」

受話器を置き深く椅子に腰かける瑠璃。

「蛭様からでしたか？」

「ええ、降魔が現れたそうです」

「そうですか。とうとう、現れてしまいましたね」

「かつて大正の時代に現れそして消えて行った魔物」

今では知る者はおらず、文献も残っていないのだ。

「魔からこの日本を護ってきた蛭のお爺様。一郎おじ様はやはり予期していたのかしら？」

「そうでしょう。蛭様の両親の死も関わっているという情報もありました」

「しかし、一郎おじ様もさくらお婆様もあの方たちもお亡くなりになってしまった今。戦えるのは蛭のみ」

「では、フランスとアメリカそれに賢人機関に連絡をした方が」

「ええ。お願いウインフィールド」

「畏まりました」

「ああそれと」

部屋を出ていく彼を瑠璃は引き留めた。

「フランス行きのチケットを用意してくださいね」

「なるほど。アイリス様の下へ」

「蛭は預けていたモノを取りに行くそうです」

「そうですか。お嬢様、思い出したのですが彼女達にも一応連絡を」

「ピク」

それを聞くと瑠璃の耳が反応した。

「いけません！彼女達にそんなことを言ったらすぐさま蛭の所に来るに違いありません！」

「あの、お嬢様・・・」

「何故かは知りませんが皆おば様たちの生き写しのような顔でさらに同じ名前を貰っているのですよ?!」

「は、はぁ・・・しかし、神崎重工・・・すみれ殿には一応あの件もありますしお伝えした方が・・・」

「ッ。それは、確かに仕方ありませんけど・・・そこは、ウインフィールドに任せます!! いいですね!!??」

「は、はい!!」

ウインフィールドかつてない彼女の怒りに震えた。

その夜、瑠璃は自分のベッドで蛭くん人形を一晚投げては蹴っていたという・・・。

——IS学園 地下室

IS学園にある地下室のモニタールームで千冬と真耶は先の戦闘の映像を見ていたのだが・・・。

「なぜだ！なぜ、あの時の映像だけない！？」

「わかりません・・・。綺麗さっぱり消されています」

そう。何者かによってデモンベインと降魔との戦闘の映像だけ存在しないのだ。

「大神殿・・・ああ、大神は何も言わんし。一体何なのだ！？」

「あの、先輩。落ち着いて・・・はい、これコーヒーです」

「塩は入っていないだろうな？」

「ぎく」

「・・・真耶」

「ひ~~~~~!!!!」

その夜、真耶の断末魔が人知れず響いていたという。

その頃覇道財閥地下研究所

「ふっふっふ。吾輩にかかればIS学園のプロテクトなお茶の子
さいさいなのである!」

ギターを弾きながらモニターの前で興奮しているキチガイが一人
いた。

「博士何パソコンの前でニヤついてるロボか?正直言ってキモい
ロボ。AVを見て興奮してる中学生ロボ」

とそこに何故かロボと語尾につけるロボっ子が現れた。

「ヤメテ!そんな幼気な少年をみるような目で私を見ないで!!」

「博士、黙れロボ」

「エルザがくエルザが冷たいく」

「はあ、こんなことならダーリンと一緒に学園にいけばよかったロボ」

「そういえば、蛮がフランスから帰った後こっちに来ると言っていたぞ？」

「いきなり、真面目モードに入らないで欲しいロボ」

「さて、奴に頼まれていた武器と術式を完成させるか」

「あー、勝手に振っておいてこれはないロボ。ダーリン、エルザ寂しくて死んでしまうかもロボ」

そう、彼こそ蛮が神に頼んだ男ドクターウェスト。
とその助手のエルザである。

ぶっちゃけ、やっとうご登場である。

「けど、今回はこれだけロボ」

「なんですとお?！」

第八話 今日の俺はちょっとだけ本気だぜ……一割くらいな（後書き）

この作品はサクラ大戦のその後のifの話なんだよ!!

な、なんだってー！ー！ー！！！！

て、声が聞こえそうだ。

今回シリアスだったけど、この作品は8対2の割合でシリアスが2なのでご安心を。

それと、オリヒロインというわけではありませんがサクラ大戦のヒロインたちの孫がいつか登場します。

名前を考えるのが面倒なのでそのまま瓜二つという設定です。そっ
ち方が皆様の想像力が膨らむでしょう2828

ちなみに、私は3が大好きなので巴里勢を鼻屑してしまいますが許
してね！

あとフランスにいくからってどっかの量産機の企業の隠し子との出
会いがあると思ったら大間違いだ!!

代わりにロリが出るよ!!

第九話 さて、フランスにやってきました。フラグを立てると思ったら大間違い

今回とある原作キャラが登場します。

まあ、こんな風になっていても不思議じゃないって感じがするあの子です。

第九話 さて、フランスにやってきました。フラグを立てると思ったら大間違

やあ、平民諸君ごきげんよう。ただいま、日本からフランスにやってきた大神蛭だ。

ちなみに今の通り名は『魔を断つ蛭』で通ってる。

さて。今の俺は空港を後にし、レンタカーである場所に向かっていく。

本当なら巴里にでも行ってパリジェンヌとお茶でもしたいところなんだか瑠璃が駄目って言うんだぜ？

しかも、“シャノワール”にも言っちゃダメっていうしさあ。まあ、言ったら何かを失いそうで怖いんだがな……（童貞的な意味で）

けど、時間も限られているのも理由の一つだ。

『で、フランスに何しに来たのだ？』

何も知らないアルは蛭に聞いた。

「ああ、お前は知らないんだったな。俺の爺さんと婆さんのまあ、

形見かな？それを、フランスにいる知人に預けてあるんだ」

『何故だ？本来ならばお前が貰うべきものだろう？』

「ちょっと訳ありなんだよ」

『そういうことは相手は年寄りか。なら、問題ないな（ニコニコ）』

「年寄り、ねえ・・・」

アレを年寄りと言うなら人類はとくに不老の薬を見つけている違いないよな・・・。

言葉に出さず、心の中でそっとしまい俺は目的に向かって車を走らせた。

「さて、着いた」

『お、おお～』

辿りついた場所を見てアルは意外にも驚いた。いや、驚かせられ

たと言えはいいのかもしれない。なぜなら、その場所は目の前には
広がる湖！さらに、ここ一体を自分のものと言わんばかりの象徴であ
る・・・城が立っているのだ・・・。

城門が開き、蛮は車を進める。入口の前まで持っていきそこで降り
る。

そこには赤絨毯が敷かれその横にはメイド、メイド。ずらりとメ
イドが並んでいた。

「・・・・・・・・メイドさんキターーーーー！！！」

『さっきまでのカツコイイ顔が台無しじゃな』

そんな二人・・・？の前にメイド長と思わしき人物が現れる。

「お待ちしておりました、蛮様。さあ、どうぞこちらに」

「ありがとうございます。で、このあと一緒にティータイムでも」

さっそくナンパしていた。

意外にも周りのメイドも羨ましいそうに見えるのはなぜだろう・・・
。そして、このメイド長も顔が少し赤い・・・。

「大変嬉しいのですが・・・」

「ですが？」

「――さっそくナンパなんてまったく。童貞の癖に生意気だよ、蛮ちゃん」

「誰が童貞だあ???!」

童貞と言われガンを飛ばすがそこにはメイドしかない。そして、すぐに平静に戻り視線を下に向ける。

「や、久しぶりだね。蛮ちゃん」

「あ、アイリスおb『お姉さん』・・・アイリスお姉様お久しぶりです」

「素直な子は好きだよ？」

そこには、どうみても二けたに満たない少女がいた。

イリス・シャトーブリアン。愛称アイリス。

実年齢ぴく歳。かつて、大正の時代、大帝国劇場、帝国歌劇団・花組の一人として幼い頃から舞台に立っていた。

しかし、その実態は魔から帝都を守る帝国華撃団の一人。その群を抜いた霊力は花組の一だった。そして、年を追うごとに他の隊員は

霊力が弱まったが彼女は弱まることはなかった。そのため、霊力の応用でそれ相応の年齢なのだが霊力で身体は幼少のころでその若さを保っていると言うまさに、ロリババアなのである！

ていうか、霊力って便利だね！

「にしても、少し見ないうちにちよっと老けたね」

現在、城のテラスでティータイム中である。

「もう、30歳です」

「まだ、30じゃない」

「・・・・・・」

『まさに摩訶不思議じゃな』

「（お前も人の事言えないけどな・・・）」

まあ、実際アルは4千年生きてるからなあ・・・・。どういう経緯で覇道財閥に來たかは不明。で、デモンベインを無理やり？入れた感じなのだが・・・。

この世界はごっちゃだからな・・・。

「で、降魔が現れたんだってね」

「はい。だから、預かってもらっているアレを取りに来ました」

「だと思ったよ」

テーブルの上に置いてあった鐘でメイドを呼んだ。少し経ったあと長いケースを持って来た。

それをアイリスが開けるとそこには二刀の刀があった。

「神刀滅却と靈劍荒鷹。お兄ちゃんとさくらの愛刀……。これを持つのは蛮ちゃんが一番相応しいとやっぱり思うよ」

俺は二刀の刀を持つ。まあ、形見と言えいいのかどうかはわからない。けど、これは確かに俺の刀だ。爺さんと婆さんの意思と使命を継いだ俺の……。

「それと、これ」

そう言ってアイリスお姉様から差し出されたのは二挺の大型自動拳銃と回転式拳銃だった。

「これって、もしかして」

「うん。マリアがもしかしたら必要になるって思って造っておいただよ？色々な技術の塊で弾がなくても霊力を通せば撃てるらしいし、加護とか色々あって・・・」

しかし、これはどうみても原作に出てくるネロの魔銃なんだよな・・・。

後のデモンベインの主兵装ともいえる武器で、クトゥグアとイタクアを使うためにまあ媒介？制御装置？みたいな役割を果たすのだからんだかんだでこっちの名前が定着している。けど、丁度いい土産が手に入った。

「・・・重いな」

「けど、マリア曰く世界最強の銃よ。らしいけど？」

だろうね。アルの術式にはこの二挺拳銃はないから丁度良かったと言えばよかったが・・・。

「で、孫のマリアは今どこに？」

そう、マリアおば・・・お姉さんの孫はあの人にとっくりで。ていうか、爺さんの知り合いの女性の大半の孫は瓜二つで皆名前を譲り受けている。

遺伝子って怖い。

「今シャノワールで働いているよ。でも、マリアちゃんってI Sの
国家代表だったんでしょ？」

「ああ、そうなんだっけ？俺あいつが国家代表って風の噂程度しか
知らなかった」

なんでも、第一回と第二回連続出場で射撃部門は連続一位だったらしい。

「なんで？連絡来なかったの？」

「いや、マリアだけじゃなくてあいつらがしょっちゅう連絡寄越す
から携帯変えた」

「いけないよ、女の子はデリケートなんだから」

デリケートね。皆、個性が強いから全然そうは思わないけど。

「まあ、考えとく。アル、こいつらを収納しておいてくれ」

『うぬ』

すると、刀と銃は粒子となり本に吸い込まれた。

「へー、これが蛭ちゃんなの？」

「自称4年千生きた魔道書だってよ」

『自称じゃないわ！』

「わあ、喋るんだ！」

「アルが自分で意識すればな。普段は俺としか会話できないようになってる」

『ふん。こやつは我が相手しないと寂しくて死んでしまうからな』

「俺は兎か。とにかく、アイリスお姉様ありがとう」

「もういくの？」

「ああ、色々忙しいし」

「そっか」

俺は紅茶を飲み干し、アルを抱えてテラスを出ようとしたがそこで彼女に止められた。

「蛭ちゃん。なんで、降魔が現れたかはわからないけど頑張つて。蛭ちゃんは、お兄ちゃんとさくらと・・・私達の孫なんだから！」

それを聞いて蛭はふっと笑みを零した。

「当たり前だ。あんだだけ弄られたんだ、負けたら怒られちゃう」

「ふふ、そうだね。あ、アルちゃん借りていい？」

「なんで？」

「いいから。その間に車で待ってて」

「?・・・わかった」

蛭はそう言ってアルを渡し、車を出しに行った。

残されたアルはアイリスに抱えられたままゆっくりと玄関へ目指す。

『どうしたのだ?』

「うんと、ちょっとお話したくてね。蛭ちゃんと出会ってどのくらいなの?」

『うぬ・・・数年は経つな。それでも、あいつのことはわかっているつもりだ』

「そっか。蛭ちゃん、アレでも結構個性強いから」

『わかっておる。なんだかんだで、あいつは素直だ』

「ふふ、そうだね」

『ところで、我からも一ついいか?』

「ん、なに?」

『唯依という名前を知っておるか?』

アルは度々蛭が唯依という名前を口ずさむのを知っている。だが、その名を持つ人間にあったことがないのだ。だから、旧知の中である彼女なら知っていると思ったのだ。

「ん、聞いたことあるんだけど。でも、知らないな。何、その子蛭ちゃんの彼女?」

『いや、あいつは常に童貞だ』

「そうだよね」

彼女達は知らないのだ。この世界に【葛城唯依】の存在はない。ただ、蛭だけは知っている。覚えているのだ。

『では、誰なのだ?』

「ん、まあ大丈夫じゃない?だって、蛭ちゃんだよ?」

『うぬ・・・それもそうだな』

二人はそれほど大きな問題ではないと思いこの話はきりあげた。
そのまま、二人は玄関までいくと蛸がすでに車を回していた。

「はい」

「どうも。で、何を話したんだ？」

「秘密♪」

「さいですか。それじゃあ、いくよ」

「うん、気を付けて」

「ああ」

軽いあいさつを交わし蛸は車を走らせた。

近くでみると大きかった城がだんだんと遠ざかっていく。

そして、城が完全に見えなくなるぐらいになりアルが蛸にあることを聞いた。

『ところで蛸』

「なんだ？」

『実は、最初から聞こうと思っていたのだがな？』

「ああ」

『なぜ、タキシードなのだ？』

「いや、私服なんだけど」

『その帽子もか？』

「ああ」

そう、タキシードに謎の帽子。

明らかに私服ではない。ないのだが・・・

『（こやつセンスはわからん）』

第九話 さて、フランスにやってきました。フラグを立てると思ったら大間違

アイリス登場!!

うん、霊力の応用でエターナルロリになっけていても不思議じゃないと思う。

あと、名前だけで出たマリア。いま、シャノワールにいる設定です。ネタバレになりますが、帝都組はマリア、アイリス（ヒロインではない）神崎重工の名前は出たけどすみれば出すか未定。

巴里組はエリカ、グリシヌ、・・・ロベリアは性格を考えた結果。一郎以外を好きにならないと思う。まあ、それを言っちゃうと他のヒロインたちもそうなんですが。

そこは、ご都合主義ってやつで!!

コクリコはアイリスと同じ扱いでいこうかなと思っている。あと、花火は好きなんだけど機体とかヒロインのバランスを考えると・・・

ぶっちゃけ中距離と遠距離型に偏ってしまう・・・。

まとめると、帝都ですみれ。巴里で花火が出るか出ないかです。

そして、オリジナルというわけではありませんがガンソードの設定も一部入っているということで、まだ感想であの存在からしてエロのファサリナさんの登場を考えております!!

蜜、童貞の危機！！

で、ここで問題なのが。彼女の学年。教師でもいいけどやっぱ生徒がいいよね！三年が妥当だけどここはあえての一年か・・・。

というわけで、これアンケートにします！！

（本当はたまには感想が多くほしいとは言えない・・・

登場時期は二巻と三巻の間かな？

というわけで、次回もよろしく！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3816x/>

おっさんが逝くIS物語

2011年11月18日23時18分発行